

一、各曲の扉に松野奏風（謡曲）三宅藤九郎（狂言）兩氏を煩はして舞台画を飾り、冗漫にならぬ程度
の解題を加へた。

一、附図として能舞台・地謡と囃子（松野奏風氏画）と能舞台各部名称を掲げ、随時参照の便に供した。

一、挿画は武藏野書院主前田信氏の厚意と努力に負ふものである。

一、改訂前の旧著「校註謡曲狂言新選」について、直接又は間接に種々教示された各位に深謝し、本書に
対してもまた忌憚のない叱正を仰ぎたいと思ふ。

昭和二十六年五月

古川久

古川久

一、本書の本文は凡そ字々可成り正確の同章を撰編し、樂を撰平の曲を採入して、舞台の體裁
の精確を五番並での計照しつゝあることとし、

一、本書の撰編に於て、諸五番・狂言四番は、内容殊に其の曲楽の外楽曲と編みこむるものと懸念し、
その整理と式は別章とする。

一、本書の巻頭大半對照の同書本文材料として採入した、その一類は諸楽を撰平の體裁を以て、一類は諸
樂の體裁を以て採入した、その一類は諸楽を撰平の體裁を以て、一類は諸樂の體裁を以て採入した、

目 次

凡 例	一	宗 論	一〇
解 説	四	隅 田 川	七
翁	一	附 子	一〇三
高 砂	七	船 辨 慶	三三
未 廣 が り	三	附 祝 言	三六
田 向 村	七	術 語 略 解	三九
伯 母 が 酒	七	附 函	四〇
熊 野	七		



【作者】 世阿彌元清。

【時所】 春（三月）。宗盛館（前場）清水寺（後場）。

【配役】 ワキ（平宗盛。風折烏帽子、單狩衣、着附・厚板、白大口、腰帶、扇）。

ワキツレ（太刀持。素袍上下、着附・無地熨斗目、小刀、扇、太刀）。

シテツレ（朝顔。面・小面、蔓、蔓帶、唐織、着附・摺箔、文）。

シテ（熊野。面・増、蔓、蔓帶、唐織、着附・摺箔、扇、短冊）。

【参考】 古く湯谷・湯屋・熊谷・遊屋などとも書かれてゐる。平家物語の卷十重衡海道下りの条に見える挿話に基づき、人物はみな事件の当事者である。

【序の段】
 宗盛―清盛の次男
 重盛の弟 知盛の兄
 池田―遠江国磐田
 郡にある。

名乗笛でワキ、ワキツレを従へ登場。

ワキ（名乗）「これは平の宗盛なり。さても遠江の国池田の宿の長をば、熊野と申し候。久しく留め置き候ところに、老母のいたはりとして申して度度暇を乞ひ候へども、この春ばかりの花見の友と思ひ、いまだ暇を出ださず候。いかに誰かある。」ワキツレ「御前に候。」ワキ「熊野暇のことを申さば、こなたへ申し候へ。」ワキツレ「畏まつて候。」

ワキは脇座に行き床几にかかり、ワキツレ太刀を置いてその次に下にある。次
 第の囃子でツレ登場。

【破の前段】

ツレ（次第）夢の間惜しき春なれや、夢の間惜しき春なれや、咲く頃花を尋ねん。地夢の間惜しき春なれや、咲く頃花を尋ねん。ツレ（サシ）これは遠江の国池田の宿、長者の御内に仕へ申す朝顔と申す女にて候。「さても熊野久しく都に御入り候が、この程は老母の御いたはりとして度度人を御上せ候へども、更に御下りもなく候程に、この度は朝顔が御迎ひに上り候。」（道行）この程の旅の衣の日も添ひて、旅の衣の日も添ひて幾夕暮の宿なら